

Title	「わけだ」「わけではない」の用法についての一考察
Sub Title	
Author	大場, 美穂子(Oba, Mihoko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2013
Jtitle	日本語と日本語教育 No.41 (2013. 3) ,p.47- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-00000041-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「わけだ」「わけではない」の 用法についての一考察

大 場 美穂子

1. はじめに

「わけだ」¹という形式は、寺村秀夫（1984）以来、「事実からの推論の必然的な帰結」を表すとされることが多い。以下の例を参照されたい。

(1) 雨が降っている。今日は、野球の試合はできないわけだ。

上記の例について、「わけだ」は「雨が降っている」（事柄 P とする）ことから「今日は野球の試合ができない」（事柄 Q とする）ことを必然的な帰結として表していると説明されることが多く、また、P から Q を推論するとは言えないまでも、P に関連させて Q を述べる形式であるという認識から、「わけだ」は「説明」を表すなどとされることもあり、いずれにしても、「わけだ」という形式は、先行する P と「わけだ」が接続する Q との何らかの関係を表す形式であるという認識が、寺村（1984）以来ずっと存在する。

一方、「わけだ」は、事実からの必然的な推論を表す形式であるとされるもう一つの形式「はずだ」との比較から、次のように言われることが多い。

「すなわち、「Q ハズダ」は、前にも記したように、Q が未知で、その事実性が問われていることが引き金となっているのに対し、「Q ワケダ」では、Q は事実推定は既定、既知のことであるが、その事実がどうしてそうなのか、という問いに対して答えようとする心理が引き金になっている、という点である。」（寺村 1984: 277）

この引用にある通り、「わけだ」は「はずだ」と比較した場合、何らかの「既定、既知」について述べるという特徴が際立っているという指摘がいろいろ

ろな形で行われてきている。

例えば、以下の2例を比較されたい。

(2) 大阪を3時に出発すれば、6時には東京に到着するはずだ。

(3) 大阪を3時に出発すれば、6時には東京に到着するわけだ。

例(2)(3)を比較すると、確かに「はずだ」を用いた文は論理的可能性を述べるのにとどまっているのに対して、「わけだ」の文はそれが「既定、既知」であるという内省が働く。この「既定、既知」とはもう少し具体的に言うと、どのようなものだろうか。

以上の2点を踏まえ、本稿では以下のような視点から「わけだ」の用法について考察する。

1. 「わけだ」は本当に二つの事柄間の関係を表す形式であることができるか。
2. 「わけだ」が表す「既定、既知」とはどのようなものか。

2. 先行研究

冒頭に述べたとおり、「わけだ」は寺村(1984)以来、事実(事柄P)からの推論の必然的な帰結(事柄Q)を表すとされることが多かった。このように規定すれば当然、PとQの関係にはどのようなものがあり得るかという方向に考察が進むであろう。そこでまず、「わけだ」が二つの事柄間の関係を表す形式であるとして、「わけだ」の用法をPとQの関係に注目して用法を分類した横田淳子(2001)について検討する。

2-1 横田淳子(2001)

「わけだ」の基本的意味は、二つの事柄PとQの間に論理的な関係があるということを表す形式であるとされることが多い²。このような立場から、事柄PとQの間にどのような関係が成立しているかによって「わけだ」の用法を分類したのが、横田(2001)である。

横田(2001)は、「わけだ」の基本的な意味は、「二つの事柄の間に筋道や

道理があり、一つの事柄から筋道や道理に沿って考えていくともう一つの事柄にたどりつく、もう一つの事柄とはそのような論理をたどっていったところから出てきた帰結であるということを述べるもの」(pp.49-50)であるとしている。この説明から分かる通り、横田(2001)も寺村(1984)を踏襲し「わけだ」は二つの事柄の間に何らかの論理的な関係があるということを表す形式であるという立場をとっている。その上で横田(2001)は、二つの事柄の間の関係にはどのようなものがあるかという観点から、「わけだ」の用法を以下の5つに分類した³。

- ① **帰結用法 1 結果**「波がずいぶん荒いですね。今日は船が出せないわけですか。」
- ② **帰結用法 2 原因・理由**「波がずいぶん荒いですね。台風が近づいているわけですか。」
- ③ **納得用法**「台風が近づいている。どうりで波が荒いわけだ。」
- ④ **捉え直し用法**「波がずいぶん荒いですね。海水浴シーズンも終わりというわけですか。」
- ⑤ **派生用法**「台風が近づいているわけだから、つりは無理だろう。」

上の用例を見ると、まず①から④までは、実線で示した事柄 P と破線で示した事柄 Q との関係を表述するものであると説明されている。それぞれ、①は P が原因・理由であり Q という結果になったという関係、②は逆に P が結果でありその原因は Q であるという関係、③は P のために Q という結果になっているという点は①と同じであるが、話し手はまず P に先だって Q の事態を認識しており、その原因 P を後で知ったという関係、④は P という事柄を別の視点から見ると Q ということが言えるという関係、を表すとされている。また、⑤は他の4つと異なり、「Q わけだ」に先行する P が指摘できないものであるため、「派生」用法(すなわち周辺的な用法)とされている。

上の整理は、「わけだ」を二つの事柄の間の関係を表す形式と見る場合に

は、必ず必要なことであるが、このような整理をして P と Q の関係を見ても、その関係はさまざまである。特に、①は P が原因となって Q が生じているのに対して、②では逆に Q が原因となって P が生じるという関係である。もちろん、横田（2001）は、「わけだ」によって表される P と Q の関係は事柄の事実的な因果関係ではなく、「P から Q が推論される」ということであるというような主張であるから、①と②が逆になっているということについては、横田（2001）の主張に沿う限り特に問題は生じないが、推論がどのように進むのかという観点から改めて考えてみた場合でも、①③のように原因から結果を推論する場合と、逆に②のように結果から原因を推論する場合があります、それ以上に、④のように、事柄の因果関係ではなく一つの事柄の別の解釈を提示することをも推論の中に含むとすれば、結局、「わけだ」が表す「推論」とは P と Q の間に「関係がある」と言っているのみであるという結論にたどり着く⁴。

また、⑤のように先行する事柄 P が存在しない「わけだ」の用例も少なくないことを合わせて考えてみると、「わけだ」が二つの事柄 P と Q との関係性を述べる形式であるとする必要があるかどうか、疑ってみる必要はないだろうか。

このように、事柄 P と Q の間の事実的な因果関係からみれば P と Q との関係はさまざまであり、しかも、「わけだ」が事実的な因果関係とかかわるのではなくて、「推論」とかかわると考える場合でも「推論らしさ」に差があるのであれば、「推論らしさ」という点から考えて P と Q の関係を見てもおくことも必要である。そこで以下に、推論が働いているかどうかで「わけだ」の用法を分類した寺村（1984）を挙げよう。

2-2 寺村秀夫（1984）

寺村（1984）は「わけだ」を包括的に考察した初期の論考としても重要であるが、「わけだ」の用法について「推論らしさ」という点に焦点を当てて

分類したと考えることができるという点からも重要な論考である。寺村 (1984) は「わけだ」の用法について次の3つを挙げている (p. 285)。

- (i) ある Q という事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実 P をあげ、そこから推論すれば当然 Q になる、ということをする言いかた。「…コトニナル」と言いかえができる。
- (ii) P という聞き手に身近な事実をあげ、その事実は、ある角度、観点から見ると Q という意味、意義がある、ということを書き手に気づかせようとする言いかた。「言いかえると…」というぐらいの軽い感じの場合もある。
- (iii) $P \rightarrow Q$ という推論の過程は示さず、Q ということを、自分がただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があつての立言なのだということを言外に言おうとする言いかた。乱用すると独断的な、押しつけ的な印象を与える。

このような用法が指摘されている。ここでは、寺村 (1984) には直接述べられてはいないが「推論」という観点から整理が行われていて、(i) は P から Q と推論できるという筋道が明確に感じられるもの、(ii) は P から Q と推論するとまでは言えないが、P と Q が存在していて P を別の角度から見ると Q となるという関係にあるもの、(iii) は P が存在しないため推論しているとは言えないものという分け方が行われているようである。

すなわち、「推論」という観点から見ても、「わけだ」のすべての用法にそのような特徴があるのではないということになる。

以上、ここまで横田 (2001)、寺村 (1984) を見てきたが、その結果、「わけだ」の用法は、事柄 P と Q の間の関係 (特に、Q が P からの推論であるということ) を述べているという主張が妥当であるかどうかをもう一度考える必要があるのではないかとわざるを得ない。

そうだとすると、「わけだ」は一体どのような意味を表すのか。それについて、以下で永谷直子 (2010) を検討してみたい。

2-3 永谷直子 (2010)

次に永谷直子 (2010) について検討する。永谷 (2010) では、「わけだ」の意味を次のように規定している。

「本稿では、「わけだ」の基本的意味として「推論の必然的な帰結」という定義は回避し、「筋道」を「聞き手が納得すること」として差し出す表現」と考えることとする。」(p.30)

先の横田 (2001) や寺村 (1984) の検討から、我々は「わけだ」が事柄 P と Q の間の関係 (Q は P からの当然の帰結であること) を述べるものであるという点について再考する必要があるという結論に至った。この永谷 (2010) では、いまだ「筋道」という考えが含まれているものの、それとは別に「わけだ」は「聞き手が納得すること」として差し出す形式であるという新たな視点が存在する。

実は、この指摘と同じような指摘が先行研究にいくつかある。

例えば、先に寺村 (1984) を検討した際、寺村 (1984) で挙げられている (ii) の用法の記述の中には、「聞き手に気づかせようとする言いかた。」(下線は筆者による) という指摘が存在していた。これは、本稿の冒頭で引用した通り、寺村 (1984) が「わけだ」について「既定、既知」と述べていることとも関係しているように思う。

また、松岡弘 (1987) には「「のだ」と「わけだ」の意味の違いを問うとすれば、前者が話し手の一方的な断定の感じが強いのに対して、後者のほうは聞き手を意識した相互了解的な断定ということになる」(pp. 3-4 下線は筆者による) と述べられている。

本稿では、横田 (2001)、寺村 (1984) の検討から、「わけだ」を「必然的推論」または「説明」というような、P と Q との関係を表す形式であるという認識から離れる可能性はないのか、と考えた。では、「わけだ」は何を表すのかというと、寺村 (1984)、松岡 (1987)、岡部 (1994)、永谷 (2010) の指摘を多として、「聞き手との間に確認が成立している」ということを表

すのではないかと考える。

3. 本稿の分析

3-1 見通し

ここから、本稿の立場を述べることにする。先行研究の検討から見えてきたことは、以下の2点である。

1. 「わけだ」は二つの事柄 P と Q の間の関係（Q が P の当然の帰結であること）を示すのではなく、
2. 話し手や聞き手が事柄について認識しているかどうかにかかわる形式である。

ここから、本稿では「わけだ」が表す基本的な意味を次のように仮定しておきたい。

「わけだ」の基本的な意味：

「わけだ」を伴う文が表す事柄が文脈の中ですでに話し手と聞き手の了解事項として存在することを表し、「わけだ」を用いてその事柄を確認するという働きを持つ。

上のような主張をするために、以下ではまず「わけではない」という形式の用法について検討する。

3-2 検証

3-2-1 「わけではない」の用法2つ

日本語教育においては、「わけではない」という形式を導入する際、次の2つの用法を分けて教えるのが一般的である。

- (4) デザートを残したが、ダイエットをしているわけではない。(おなかがいっぱいだったのだ。)
- (5) 冷蔵庫の中のビールを全部飲んだわけではない。

例(4)は、初めの「デザートを残した」という文を聞いた場合、通常聞

き手が「ダイエットをしている」と推論するだろうと考え、それを否定する用法であるとされる⁵。つまり、先行する文脈から当然であろうと推測される事柄(「デザートを残したということはダイエットをしているのだ」)について、そのような事柄は存在しないと述べる用法である。

次に、例(5)は、いわゆる部分否定の用法である。つまり、「冷蔵庫の中のビール(の一部)を飲んだ」ということは認めるが、「全部」ではないということを表す用法である。このように文のある一部を否定する用法は、以下のような例でも見られる。

(6) 好きでこの仕事をしているわけではない。(家族のためにしているのである。)

(7) 悲しいから泣いているわけではない。(うれしくて泣いているのである。)

例(6)では「この仕事をしている」ということは認めるが「好きで」はないということ、例(7)では「泣いている」ということは認めるが「悲しいから」ではないということを表している。これらは、文のある一部を否定するということを表す。

では、文のどの部分が否定されているのかについての判断はどのように行われているのだろうか。以下の例を参照されたい。

(8) 机の上にあった本を佐藤さんにあげたわけではない。

この例では、次の2つのどちらにも解釈可能である。

(9) 机の上にあった本を佐藤さんにあげたわけではない。かばんの中にあった本を佐藤さんにあげたのだ。

(10) 机の上にあった本を佐藤さんにあげたわけではない。机の上にあった本を田中さんにあげたのだ。

つまり、文のどの部分が否定されるかということは上記の文だけ(例(8)だけ)で決めることはできないということになる。「わけではない」という文が使用された場合に、私たちがどの部分が否定されているかを理解でき

るのは、実は文脈や発話の状況に寄っているということである。このような「わけではない」の用い方は、実は例(4)の「わけではない」の用い方と並行的に考えることができる。つまり、

(11) デザートを残したが、ダイエットをしているわけではない。(例(4)再掲)

(12) 私は冷蔵庫のビールを飲んだが、全部飲んだわけではない。

(13) 私はこの仕事をしているが、好きでしているわけではない。

(14) 私は泣いているが、悲しいから泣いているわけではない。

(15) 本を佐藤さんにあげたが、机の上にあった本をあげたわけではない。

(16) 机の上にあった本を人にあげたが、佐藤さんにあげたわけではない。

「わけではない」の文の中のどの部分が否定されているかが理解できるということは、「わけではない」の文の解釈に先だって、話し手と聞き手がその事態に関連した何らかの了解をしているという前提が存在し、その了解のある部分が事実と異なっているということが「わけではない」によって表示されている。

例えば、例(11)では「ダイエットをしているわけではない」という文の解釈に先だって、聞き手には「デザートを残す者はダイエットしていることが多い」という了解があり⁶、その了解が事実と異なっているということが「わけではない」で表示されている。同様に、例(15)では、「本を佐藤さんにあげたということは机の上の本をあげた可能性が強い」という了解があり、その了解が事実とは異なっているということが「わけではない」によって表示されている。

このように「わけではない」の用法について考察してみると、この形式は「これまでの文脈や発話状況から話し手と聞き手の間で了解されていると考えられている事柄を否定する」ために用いられているということが言

えるだろう。

「わけではない」という形式の肯定の形が「わけだ」とであるとすれば、「わけだ」の用法について、「これまでの文脈や発話状況から話し手と聞き手の間で了解されていると考えられている事柄を確認する」ために用いられるという仮定は、それほど突飛なものではないと思われる。

3-2-2 必然的な結論であっても「わけだ」が使えない場合

一般的に「わけだ」は推論の必然的な帰結を表すとされているので、ここで必然的な帰結であっても「わけだ」が使えない場合について見ておこう。永谷 (2010: 29) に挙げられた次の例を参照されたい。

(17) A: メンバー全員から集めるといくらになるでしょうか。

B: 1 人 1000 円だと、5 人で 5000 円に {なります／*なるわけです}。

上の文では、「わけだ」が使えないということであるが、それはなぜだろうか。単に「わけだ」が「1 人 1000 円だ」ということから「5 人で 5000 円だ」という帰結に至ったことを表す形式であるとするなら、上記の例は「わけだ」が使えてよいということになる。しかし、ここでは「わけだ」を用いることはできない。

永谷 (2010: 31) には次のような例も挙げられている。

(18) (小学校の算数の時間に教師が)

1 人 1000 円だとどうなるでしょうか。(黒板に 1000 円の絵を 5 つ貼る)

1 人 1000 円だと 5 人で 5000 円になるわけです。

上記の例 (17) に「わけだ」が使えないのに対して、この例 (18) には「わけだ」が可能であるのは、どのような理由によるのか。

それは、永谷 (2010) にもある通り、「発話時以前にはいずれか一方の領域にあった「道筋」が、ある過程を経て、話し手・聞き手双方の領域に存

すること（存するという見込み）を「わけだ」を用いて示している」（p.31）と言えるだろう。

つまり、例（17）では、「1人1000円だと5人で5000円になる」ということを当該の発話が行われたことによって初めて確認されたのに対して、この例（18）では「1人1000円だと5人で5000円になる」ということが「わけだ」の文が提示される以前、すなわち絵が5枚貼られた時点ですでに聞き手に了解されているということを「わけだ」が示しているということが出来る。

ここまで来ると、「わけだ」の文は、話し手と聞き手の間ですでに了解されている事柄について確認するために用いられているという予想が成り立つ。しかし一方で、上の例では、まだ「わけだ」が「推論」をも表すという主張を否定することはできない。そこで、以下では「わけだ」が推論を表すとは言いにくい例について、「わけだ」が話し手と聞き手の間ですでに了解されている事柄について確認するために用いられるという主張が維持できるかどうかについて検討しよう。

3-2-3 推論過程が示されない「わけだ」

寺村（1984）の中で（iii）と分類されたものは「わけだ」を用いた推論過程が示されないものとされている。

このような指摘は、他の論文にも見られる。例えば、松岡弘（1987）にも、「講演会などでは「わけだ」が連発されることがあり、これは寺村氏の分類の3番目に相当するのであるが、これなどは話し手の側に、自分のしゃべっていることは聞き手も承知の前後関係の中で述べているのであり、ことさら因果関係を述べなくとも納得してもらえるはずだという意識がある場合に生ずる」（p. 7）と言っている。

以下の例を参照されたい。次の例はウェブサイトで公開されているインタビューである。大学の担当授業について聞かれた教員が、授業で携帯電

話について考察したと答えたところ、その研究はいつごろ始めたのか、また、その頃は今のような携帯電話を誰もが持つ時代になると思っていたかとインタビュアーに問われ、答えている場面である。

- (19) そうですね。もう携帯電話は現実のものになってしまったわけです⁽¹⁾けれども、まだ登場しなかったころ、つまり僕らが子どものころ、50年ぐらい前とかね、携帯電話は究極の、理想的な夢のコミュニケーション手段だったわけです⁽²⁾よ。どこにいても連絡が取れるというのが実際の形になって、しかも魅力を感じる人が多いそうだった。あるいは、今までとコミュニケーションの習慣が違う、どこでも電話できる状態っていうことは今までなかったわけです⁽³⁾から、(携帯電話が)普及してくると「プライバシーが漏れる、漏れない」とか、社会問題になってくる可能性もね、あるわけです⁽⁴⁾よ。そういういろいろなことを含めて、社会的に注目されるだろうと思ってやったわけです⁽⁵⁾。

<http://www8.plala.or.jp/revir/lab/interview.html> 2013年1月20日採取

この例においては、「わけだ」が畳み掛けるように使用されているけれども、ここには何らかの推論があるとは考えにくい。ここでは、松岡(1987)でも指摘されているように、「わけだ」が用いられているのは、話し手の側に、自分のしゃべっていることは聞き手も承知の前後関係の中で述べているという意識があるためであると思われる。

つまり、例えば、用例中の(1)の「わけだ」は、携帯電話が仮想された未来のものではなくすでに現実のものであるということについては、当然聞き手も知っているという前提で、それを確認するために用いられている。つまり、ここでは、「わけだ」が何かの推論の当然の帰結を示しているというのではなく、聞き手も当然了解している事柄を提示するために「わけだ」が用いられている。

同様に、用例中の(2)(3)の「わけだ」も「50年前は携帯電話が夢のコ

コミュニケーション手段であったこと」や「どこからでも電話できるという状態は今までなかったこと」は聞き手にも当然了解されているということを示すために「わけだ」が使われていると考えられる。

本稿では、「わけだ」を話し手と聞き手がすでに了解していることを確認するために用いられると仮定した。上記のような例は、まさにこのような仮定に合致するものであると思われる。

ところで、聞き手が十分に当該の事柄について了解しているわけではない場合にも「わけだ」が用いられることがある。この場合には、「わけだ」を用いてあたかも話し手と聞き手の間の了解事項であるかのように述べることによって、聞き手を文脈の中に引きこむという効果が期待されていると考えられる。

このような「わけだ」の用い方は、寺村（1984）の（iii）の用法の説明の中でも指摘されているように、聞き手にとってあまりに唐突な事柄について用いられると、「独断的で、一方的な」印象を聞き手に与えてしまうことがある。以下の例を参照されたい。

- （20）唐突ですが、私はバイトをしているわけですよ。曲がりなりにもミュージシャンである私がこんな所帯染みた話をするのはアレかもしれませんが、まだまだ名も無いバンドマンが音楽で飯を食えるほどこの国は裕福では無いのです。

http://www.h5.dion.ne.jp/~upset/creature/creature_6.htm 2013年1月20日採取

この例は、ブログの記事の一番冒頭から引いたものであるが、最初の文にいきなり「私はバイトをしているわけだ」と述べられている。この場合のように極めて個人的な言明については、いきなり「わけだ」と言われても（筆者自身が言っている通り）唐突で一方的な印象がある。それは、「わけだ」がすでに話し手と聞き手の間で了解されている事柄について述べる形式であると考え、納得できることなのではないか。そうであるからこ

そ、上記の例では第二文に、冒頭で述べたことについて補足的なことが述べられているのであろう。

この例で「わけだ」を用いているのは、「わけだ」を用いることによって、聞き手との間に「私はバイトをしている」という事柄についての了解がすでに成り立っているという述べ方をし、聞き手を自分の文脈の中に取り込むという意図があると考えられる。このような文を乱用すれば、寺村(1984)が述べている通り、一方的な印象を与えてしまうが、少数を用いて表現効果を狙うということはあるように思う。

いずれにしても、上記の2例(19)(20)の「わけだ」は何らかの推論の帰結と考えることは難しい。ここでは、話し手と聞き手の間ですでに了解されている事柄を示すために「わけだ」が用いられると考えるのがよいのではないか。

以上、「わけではない」の用法についての検討、推論を述べているにも関わらず「わけだ」が用いられない例についての検討、「わけだ」が推論を行っているとはいにくい例の検討を通して、「わけだ」という形式は、推論を述べる形式であるというよりも、話し手と聞き手の間ですでに了解されている事柄について改めて確認する形式であると考えるのが妥当であるということを述べた。

3-3 「わけだ」の用法

3-3-1 「わけだ」の用法の3分類

このように、「わけだ」が話し手と聞き手の間ですでに了解されている事柄について述べていると考えることにすると、なぜそのようにすでに了解済みの事柄を述べる必要があるのかという観点から、「わけだ」の用法を整理することができるようにと思われる。

A: これまでに述べられた事柄から、話し手と聞き手に共有される事柄について確認する。

- B: これから論を展開するに当たり、その前提となるような、話し手と聞き手に共有されている事柄について確認する。
- C: 新情報を際立たせるために、述語部分が話し手と聞き手に共有される事柄であることについて確認する。

「わけだ」という形式は、話し手と聞き手の間ですでに了解済みの事柄について確認するために用いられるのであるが、Aの用法は、これまでの話の流れからこのような事柄が共有されていることになるだろうと確認する用法であり、Bの用法は、これから話をするに当たって、前提となる事柄について確認するという用法である。また、Cは、文の中の一部がすでに話し手と聞き手との間で共有されている情報であることを示すことによって、その他の情報が今提示されたことであるということを際立たせる用法である。以下の例を参照されたい。

- (21) 三島の回想によれば、彼はその一世を風靡した人気作家に向かって「僕は太宰さんの文学はきらいです」と言った。すると太宰は誰にともなく「そんなことを言ったって、こうして来ているんだから、やっぱり好きなんだよな」と言ったという。三島は「今では自分も同じ目にあうようになった」と書いている。若い人々が三島のところにやってきて、面と向かって「僕はあなたの作品が好きじゃない」と宣言するわけだ。(村上春樹『サラダ好きのライオン 村上ラジオ3』)
- (22) 大学はいま市場による淘汰が進んで、どこも危機的状況なわけです。だから、「危機だ、危機だ」っていう警鐘を鳴らさないと、制度改革も意識改革も進まない。(内田樹・名越康文『14歳の子を持つ親たちへ』)
- (23) 話は変わって、このあいだ近所の魚屋さんに行ったら、シシャモを男女（つまり雄雌）別に並べて売っていた。値段は雄のほうがだんぜん安い。雌は子持ちで卵を持っているから、そのぶん価値が高い

わけだ。(村上春樹『サラダ好きのライオン 村上ラジオ3』)

例(21)は、「わけだ」の文の前ところで三島の回想と三島もその回想と同じ経験をしたことが述べられている。このことを踏まえれば、その同じ経験とは、「若い人々が三島のところにやってきて、面と向かって「僕はあなたの作品が好きじゃない」と宣言する」ことであるということは「わけだ」の文が提示される以前に、すでに分かっているということになるだろう。それをあえて確認するというのが「わけだ」によって行われているのであり、これは、上記のAの用法と考えることができる。

次に例(22)は、「わけだ」の文の後ろの部分で、「大学の置かれている状況に警鐘を鳴らさないと、制度改革も意識改革も進まない」ということを述べるに当たって、これまで世間で述べられている常識として「大学はいま市場による淘汰が進んで、どこも危機的状況である」ということを話し手と聞き手の間で確認するために「わけだ」を用いていると考えられる。この時、「わけだ」の以前に「大学はいま市場による淘汰が進んで、どこも危機的状況である」という事柄に関することが登場するわけではないから、「わけだ」の文はなんらかの推論から導かれた帰結ではないが、しかし、このことはこれまで世間で何度も言われていることであり、話し手だけではなく聞き手も当然知っている事柄であるという認識が「わけだ」で示されていると考えられる。これがBの用法である。

最後に例(23)は、「わけだ」の文の直前の文で「シシャモは雌の方が雄よりも値段が高い」ということは確認されている。つまり「わけだ」の文の中で後半の「価値が高い」ということは話し手聞き手の間で了解済みの事柄である。それを「わけだ」によって確認した場合には、前半の部分「雌は子持ちで卵を持っている」という部分が、雌が高い理由として新しく導入されているということが際立つということになる。すなわち、「わけだ」の文の中には、すでに了解済みの事柄が含まれているということを示すことによって、新たに導入される部分が際立つという用法であり、これがC

の用法である。

「から」節を含む「わけだ」の用例の中には、この C の用法が多い。

(24) 彼女は、恋人に振られたから、泣いているわけだ。

(25) 大雪が降ったから、バスが不通になったわけだ。

これらの文は、それぞれ次の 2 つの場合に用いることができる。

(26) 彼女は恋人に振られたから泣いているわけだから、放っておいてやった方がいい。(用法 B)

(27) 大声で泣いているから何事かと思ったら、彼女は、恋人に振られたから泣いているわけだ。(用法 C)

(28) 大雪が降ったからバスが不通になったわけであり、その責任をバス会社に負わせるのはどうかと思う。(用法 B)

(29) バスが不通だと聞いてまたトンネルで事故でもあったのかと思ったが、大雪が降ったからバスが不通になったわけだ。(用法 C)

このうち、例 (27) と (29) を参照されたい。これらの例は通常、「わけだ」は推論（「恋人が泣いた→彼女が泣いている」「大雪が降った→バスが不通になった」）が行われたことを表すとされている。しかし、本稿の考察からすると、これは推論が行われたことを表すのではなく、「彼女が泣いている」ことや「バスが不通になった」ことが文脈上、その原因を知るに先立って、話し手と聞き手の間で了解されていたことを表すものであると思われる。推論が行われたことについては、「わけだ」によって表されているのではなくて、「から」という形式によって表されているのである。

3-3-2 「わけではない」の用法の並行性

これら ABC の用法は否定の形式「わけではない」についても同様に存在する。

(30) デザートを残したが、ダイエットをしているわけではない。(用法 A)

(31) 自慢するわけではありませんが、私は子供のころ神童と呼ばれてい

たのです。(用法 B)

(32) 好きでこの仕事をしているわけではない。(用法 C)

例 (30) では、「わけだ」に先行する部分「デザートを残した」ということから話し手と聞き手の間に了解が成立しそうな「ダイエットをしている」という事柄について、そのような事柄は成立しないということについて述べたものであり A の否定と考えられる。また、例 (31) は「わけだ」の文に続く文を述べるに当たって、「自慢をしている」ということを了解事項にしないために「わけではない」という形式が用いられているのであり、これは B の否定の用法と言えるだろう。また、例 (32) は、文脈や発話状況からすでに「この仕事をしている」ということは話し手聞き手の間で了解済みであることが示されているため、「好きで」という部分が否定されているということが際立つことになるのだと思われる。つまり C の否定の用法であると言えるのではないか。

3-3-3 なぜ「わけだ」は推論の帰結を表すと言われることが多いのか

これまで「わけだ」の意味を考える際には、「推論」を述べる形式であるという指摘が行われることが多かったが、これについては次のように考えることができるであろう。

我々は、「わけだ」は話し手と聞き手の間で了解されている事柄を改めて確認する形式であると結論付けた。この時、話し手だけではなく聞き手にまでもすでに了解されているということは、発話状況、あるいは、それまでの文脈によって確定している事柄であるということが言えるだろう。だから、そのような発話状況や先行文脈と「わけだ」の文との関係を求めようとすれば、そこには当然関係が認められる。しかし、「わけだ」が表すのは、文脈や発話状況からの「推論の帰結」ではなく、あくまで「すでに事柄が聞き手にも了解されている」という点なのである。

これまで、「わけだ」は推論を表す形式であるとされながら、実際の「わ

けだ」の用例を検討すると、「わけだ」があってもなくても意味的にはあまり違いが見られない場合や、推論を表している場合でありながら「わけだ」を用いるとおかしい場合というものが多かった。それは、「わけだ」が推論にかかわるのではなくて、発話状況、文脈上で、話し手と聞き手との間にどのような事柄が認められているかという、情報構造上の違いを表すものであるからである。

4. 結論

ここまで、以下の点について述べた。「わけだ」という形式は、

1. これまで言われてきたような、推論が行われたことを表す形式ではなく、
2. 「わけだ」によって表された事柄が、すでに話し手と聞き手の間で了解されているということを述べる形式であり、これが寺村（1984）で言われていた、「既定、既知」ということの内実である。

これを踏まえて、「わけだ」の用法を3つに分類してみたが、それについてはいまだ不十分なところがある。特にCの用法については、もう少し検討を要すると考えるが、今回はここまでとしたい。

【注】

- 1) 本稿では、形式名詞「わけ」に断定の助動詞「だ」が接続した「わけだ」と、その否定「わけではない」について考察する。形式名詞「わけ」にはその他にもさまざまな形式と組み合わせた用法が存在するが、ここではそれについては扱わないこととする。したがって、「わけがない」「わけにはいかない」などは考察の対象外とする。
- 2) 「Pからの推論の帰結Q」と考えずに「Pに対する説明Q」と考える論考も見られるが、この二つには「わけだ」はPからQへの何らかの関係を表しているという、共通の見解がある。
- 3) それぞれの用法の名称は横田（2001）のもの。用例も基本的には横田（2001）のものを載せた。ただし、③の用例だけは、他の用例との比較を容易にするために、吉川武時編（2003）のものを挙げてある。吉川編（2003）の「わけ

だ」に関する記述は、基本的には横田（2001, 2002）に基づいていると言ってよい。また、用例の実線と破線は、説明の便宜のため筆者が付したものである。

- 4) それゆえ、「わけだ」は「のだ」と並んで「説明」を表すものとされることも多い。
- 5) 寺村（1984）はこのような例について「話し手は、まずPという発言をし、それに対して、自分がPと言ったことから、聞き手は、それなら当然Qだろうと推論するだろう、と考え（想像し）、その推論を否定する」（p. 287）と説明している。
- 6) 聞き手ははっきりとそのような了解をしているのではなくて、話し手が「たぶん聞き手は自分の話を聞いてそのような了解をするであろう」という場合も存在する。

参考文献

- 岡部 寛（1994）「説明のモダリティ―「わけだ」と「のだ」の用法とその意味の違いの比較の観点から―」『日本学報』13 pp. 15-29 大阪大学文学部日本学研究室。
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 永谷直子（2010）「話し手・聞き手の「領域」から見た「わけだ」」『東京大学留学生センター教育研究論集』16 pp. 29-41。
- 松岡弘（1987）「「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察」『言語文化』24 pp. 3-19 一橋大学語学研究室。
- 横田淳子（2001）「文末表現「わけだ」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』27 pp. 49-64。
- 横田淳子（2002）「文末表現「わけだ」の用法―「はずだ」「ことになる」との比較―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28 pp. 13-26。
- 吉川武時編（2003）『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房。